

「鱧の皮」における権力的なもの

—— 巡査と姓名判断と女主人の「街」で

高 橋 敏 夫

くりかえし出現する権力的なもの

上司小剣の「鱧の皮」^①には、「権力的なもの」が出現する。それも、一度ではなく、くりかえし、くりかえし出現する。

人に呼びかけ、人をふりむかせる。人を威嚇し、人に恐怖感をうえつけ、自発的に服従する人をつくりだす。人は従うのが当然とばかり、性急で、たえず苛立ち、暴力的な身振りをあらわにする。人が見ようとしても見えないが、人はいつも見られている（ように思う）。人のふるまいにいちいち介入し、人を規律＝訓練のもとにおく。人を矯正し、従わない者は放逐しようとする。これらは個々人とおしてあらわれるが、社会的な権力関係によってあらかじめ決定されているとともに、個々人はその関係を再生産する。しかも個々人はたとえば、呼びかけるとともに応える両義的な「主体」であるといった、「権力的なもの」の出現。

国家の抑圧装置（軍隊、警察他）が可視化する権力関係のみならず、ルイ・アルチュセールの「国家のイデオロギー装置」^②や、ミ

シエル・フーコーの「規律＝訓練」装置^③が日常的に作動すること
で不可視化される権力関係、これらによって再生産される階級的
な権力関係——以上のような権力関係の総体を「権力的なもの」
とよんでおくとすれば、「鱧の皮」には「権力的なもの」がくり
かえし、出現する。

たとえば、物語はつぎのようにはじまっている。

郵便配達が巡査のやうな靴音をさして入つて来た。

「福島磯……といふ人が居ますか。」

彼は焦々した調子でかう言つて、束になつた葉書や手紙の中
から、赤い印紙を二枚貼つた封の厚いのを取り出した。

物語には冒頭から、巡査のやうな靴音をさせ、苛立つ郵便配達
があらわれる。また、物語には、サーベルをぶら下げた水上警察
が暗闇から威圧的な大声をひびかせているし、街にはくつろぐ
人々から遊離した制服の兵士が多く歩いている。そして、記憶の

なかに、おそろしげな二本差しの武士がうかがりもする。そればかりではない……。

「権力的なもの」があらわれるたびに、物語は緊迫する。「鱧の皮」を読む者は、「権力的なもの」との直面を避けてとおるわけにはいかないだろう。しかも、「鱧の皮」にあつて、「権力的なもの」はたえずゆさぶられ、とおざけられ、あるいは弱体化されるのであれば、なおさら、「権力的なもの」は見逃せない。

しかし、奇妙なことに、従来の「鱧の皮」評および論には、このような「権力的なもの」（およびそれへの対抗）への言及がほとんどない。いったいこれはどうしたことか。

新潮社版「代表的名作選集」第二十七編「鱧の皮」（一九一七・九）の広告（早稲田文学「同・一二」）にはこうある。「一作忽ち作者の文壇的地位を固からしめたる傑作也。夫を去りたる商家の女房の遺る瀬なき心地を描けるものにして、心理を穿ちて微に入り風俗を叙して細を極め、殊に洗練を盡くせる技巧は、まさしく入神の妙と稱す可く、眞に名匠の腕の牙えを見せたる名編中の名編也。別に其の後編「妾垣」及び、好色の神官と其淫靡なる周囲を描けるものにして、発表當時噴々の世評を得たる「天満宮」を添ふ。「鱧の皮」は、ここで後編「妾垣（てかけがき）」⁽⁴⁾を従えつつ、「入神の妙」「名匠の腕の牙え」「名編中の名編」と、ほとんど絶対的な称賛をあげている。しかしこうした称賛を「広告文」特有の文体に帰することはできない。「鱧の皮」は、発表当初よりこのような称賛にとりまかれていた。⁽⁵⁾

「権力的なもの」など入りこむ余地のない作品としての評価。

しかも、文学史的な定説では、「鱧の皮」は、「天満宮」などとならび、上司小剣の代表作なのである。しかし、このようなとらえ方は、上司小剣が「権力的なもの」と無縁の情痴作家だからでなく、むしろ同時代の「権力的なもの」との関係（対抗的なそれ）の深さゆえにもたらされたのではないか。

よく知られているように、上司小剣は、堺利彦と親交があり、幸徳秋水、白柳秀湖ら社会主義者と接していた。大逆事件の発覚を契機に、社会的な主題から離れて自然主義系列にくわり、ここに「鱧の皮」が生まれた。こうした見方が、「鱧の皮」から「権力的なもの」のあらわれを見えなくしてしまったのだろう。また逆に、上司小剣の社会主義との独特な関係を重視する見方からは、「鱧の皮」を例外的な作品としつつ、そこにあらわれている「権力的なもの」をとるにたらないものとしたのではないか。⁽⁷⁾

しかし、宇野浩二は岩波文庫版「鱧の皮」の解説で次のように書いている。「小剣は、たしか、白柳秀湖などと一しよに、平民社に、いくらか関係したことがあるので、いはゆる社会主義的な教養が相當にあり、それに、理論だけの無政府主義的な思想（あるひは、好み）もかなり持つていたやうである。それで、それが、小剣の多くの作品の中に、味をつけるために、しばしば出てゐて、小説をおもしろくしてゐるところがある。さうして、それは、この集の中にをさめられてゐる小説の中にも、いたるところに、出てゐる。／＼それから、『それ』は、晩年まで、小剣の話の中にも、ちよいちよい、出た。いや、小剣に逢つて話をしてゐると、いつでも、かならず、話のなかに『それ』⁽⁸⁾が出た。ここ

で宇野浩二が指摘する「それ」とは、たとえば階級意識の芽生えや、経済状態への関心などであるが、「いたるところに、出てゐる」とみる宇野浩二は、「鱧の皮」における「権力的なもの」も思ひえがいたのではないか。もつとも、「鱧の皮」を読みはじめるとすぐ、味をつけるためとか、おもしろくするとかという副次的なモチーフとしてではなく「権力的なもの」の出現することがわかるのだが。

本論でわたしは、まず「権力的なもの」のあらわれを読みとり、つづいて「街」の物語をとらえだしたい。そして、大阪言葉と標準語の対立の意味を考え、「呼びかけ」とその応答のずれからうかがいあがる「姓名判断」の思想をたしかめる。そして最後に、もうひとつの「権力的なもの」としての「女主人」の物語を、考察してみたい。本論は、「権力的なもの」(およびそれへの対抗)という視点からみた「鱧の皮」論である。

周知のとおり、近年、権力論の変容に対応して、文学研究における権力問題も変容した。権力を国家権力に限定したうえで権力批判(権力と文学)から、権力をあらかじめ言語から社会にまで遍在化させたうえでの権力認識(文学という権力)へ。言説権力や語りの権力といったいかめしい言葉を多用することで、批判から後退することへの贖罪意識をみだしてもいたこの権力認識も、すでに飽和状態にある。権力がどこにでもあるとするなら、わざわざ示すまでもなくなる。わたしたちにいま必要なのは、権力批判や権力認識が前提にしていたはずの、「権力的なもの」への驚きの再発見だろう。「権力的なもの」からの離脱の不可避性

をもたらす「権力的なもの」との異化的な直面、といいかえてもよい。

「街」による分断

物語の冒頭を、先の引用部分からすこしさきまで、読んでみよう。「権力的なもの」の登場のありさまがよりあきらかになる。

郵便配達が巡査のやうな靴音をさして入つて来た。

「福島磯……といふ人が居ますか。」

彼は焦々した調子でかう言つて、束になつた葉書や手紙の中から、赤い印紙を二枚貼つた封の厚いのを取り出した。

道頓堀の夜景は丁どこれから、といふ時刻で、筋向ふの芝居は幕間になつたらしく、讃岐屋の店は一時に立て込んで、二階からの通し物や、芝居の本家や前茶屋からの出前で、銀場も板場もテンテコ舞をする程であつた。

「福島磯……此処だす、此処だす。」と、忙しいお文は、銀場から白い手を差し出した。男も女も、襷がけでクル／＼と郵便配達の周囲を廻つてゐるけれども、お客の方に夢中で、誰れ一人女主人の爲めに、郵便配達の手から厚い封書を取り次ぐものはなかつた。

「標札を出しとくか、何々方として貰はんと困るな。」

怖い顔をした郵便配達は、かう言つて、一間も此方から厚い封書を銀場へ投げ込むと、クルリと身体のを変へて、靴音荒々しく、板場で焼く鰻の匂を嗅ぎながら、暖簾を潜つて去つ

た。

巡査のような靴音を響かせる郵便配達は、いらいらとした調子で呼びかけ、怖い顔をして威圧的な振るまいをし、また、動作は機敏である。巡査のようなのは靴音だけでなく、動作も表情もそのようなものとして語られている。ここで語り手は、郵便配達を「巡査」とかさねつつ、その振るまいと表情を端的に語りだしている、といつてよい。

かさねられれば、たしかに、人の住所を特定し、呼びかけ、確認するという郵便配達の仕事は、戸口調査によって「国民」を掌握し管理する巡査の仕事の一端を可視化するだろう。

この部分に、語り手の「権力的なもの」への嫌悪を読みとるのは容易である。

ここで注意したいのは、「権力的なもの」がそれを相対化するものとともに登場している点である。「道頓堀の夜景は丁どこれから」につづく「街」の情景が、あたかも「権力的なもの」を分断するかのようにさしはさまれている。

こうした情景の挿入に注目すれば、「男も女も」につづく部分もまたおなじであるのに気づく。そしてさらに、この大状況から小状況へとフォーカスされる「街」が、郵便配達の荒々しいふるまいのただなかに侵入していることにも気づかないわけにはいかない。すなわち、「怖い顔をした郵便配達は、かう言つて、一間も此方から厚い封書を銀場へ投げ込むと、クルリと身体のを変へて、靴音荒々しく、板場で焼く鰻の匂を嗅ぎながら、暖簾を潜

つて去つた」という文の「板場で焼く鰻の匂を嗅ぎながら」がそれである。

「鰻の皮」は従来「京阪（かがた）情緒」を巧みにえがいた作品、とくに大阪ミナミの繁華街を「畫」のように活写した作品として評価されてきた。

「道頓堀の夜景は丁どこれから、といふ時刻」（二）といった、にぎわう街の表現にはじまり、「富田屋にも、伊丹幸にも、大和屋にも、眠つたやうな灯が点いて、陽気な町も湿つてゐた」（八）という眠る街の情景でおわる、夜の「街」の物語。「街」の活動のはじまりと活動のおわり、そして次の日の活動のための眠り。こうした「街」のおわりのない生が、物語に登場するお文、源太郎、福造らのこれまでの生をよびだし、やがて街に生き死んでいった人々をつぎつぎにうかびあがらせ、同時に人々の明日をもわずかに指し示す。たしかに、「鰻の皮」は「街」の物語といつてよいだろう。

とはいえ、「鰻の皮」はたんなる「街」の物語ではない。活動のはじまりから眠りにいたる「街」のひとつながりの情景が、「権力的なもの」の出現をねらいすますかのようにあらわれ、「権力的なもの」の連続性を分断してしまふ。「街」の物語は、「権力的なもの」との対応においてあらわれている。物語の冒頭、語り手の「権力的なもの」への嫌悪感とともに、「街」による「権力的なもの」の分断と、そして無視が示されているのである。

「街」による包圍

「街」による分断は、もちろん、冒頭部分だけではない。お文のもとにとどいた福造からの手紙を読む源太郎が、暗い河中から呼びかける大きな声を聞く場面をみてみよう。

源太郎がまた俯ぶいて、読みかけの長い手紙を読もうとした時、下の河中から突然大きな声が聞えた。

「おーい……おーい……讚岐屋ア。……おーい、讚岐屋ア。」

重い身体を、どっこいしよと浮かして、源太郎が腰硝子の障子を開け、水の上へ架け出した二尺の濡れ縁へ危なさうに片足を踏み出した時、河の中からはまた大きな声が聞えた。

「おーい、讚岐屋ア。……鰻で飯を二人前呉れえ。」

「へえ、あの……」と、変な返事をして、源太郎は河の中を覗き込んだが、色変りの広告電燈が眩しく映るだけで、黒く流れた水の上のことは能く分らなかつた。

「おツさん、おツさん。」と、お文の声が背後から呼ぶので、銀場を振り返ると、お文は両手を左の腰の辺に当てて、長いものを横たへた身振りをして見せた。

「あ、サーベルかいな。」(三)

「サーベル」の登場である。郵便配達登場の際、比喻としてあらわれた「巡査(水上警察)」の実際の登場。呼びかける大きな声といい、源太郎やお文の言葉とは異なる標準語といい、また明る

い店内と対照的な暗い河中といい、郵便配達のはなつ「権力的なもの」をいっそうあらわにした「サーベル」の登場である。

呼びかけられた源太郎は、呼びかけた相手を確認しようとするが、できない。お文に「サーベル」だと教えられたあと、つづく部分でも、この「見えない、確認できない」という状態が、「妙な声」や「何か言つてゐるやうであつたが、意味は分からなかつた」などの言葉によつて、しつようにくりかえされている。むこうからは見えているようなのだが、こちらがわからは見えない。フーコーのパノプティコン(「望監視装置」)を思い起こさせる、「権力的なもの」のあらわれである。

しかし、ここでも、物語は「権力的なもの」による場面の占有を許していない。物語のはじまりから灯されていて、展開とともにさまざまな色彩を各場面にあたえている広告電燈が、ここでも「サーベル」の大声をささげるようにあらわれる。そして、引用部分のすぐあとには、「サーベル」たちのいる暗闇とは対蹠的に、いっぱい広告電燈の灯りが示されている。「随一の名妓と唄はれてゐる、富田屋の八千代の住む加賀屋といふ河沿ひの家のあたりは、対岸でも灯の色が殊に鮮かで、調子の高い撥の音も其の辺から流れて来るやうに思はれた。空には星が一杯で、黒い河水に映る兩岸の灯と色を競ふやうであつた」。その灯りをみなながら、雇女の一人が、警察とのやりとりをまったく無視するかのよう、欄干をたたき、喇叭節を唄いつづける。

こうした「街」を背景にしてはじめて、源太郎の「無恰好」(二)さ、および「だらしなさ」からくるやや遅れた対応が、そ

して、お文の「サーベル」という揶揄的な言葉と侮蔑的な扱いが際立つのである。

「街」による「権力的なもの」の分断は、洋服を着た兵隊の話題（七）においても、また、刀を差した武士の話題（八）でもかわらない。

かわらない、というより、それは、物語の展開とともによりはっきりと示され、ついには、分断から包囲へと転じていくのである。洋服を着て街の人々から遊離している兵隊は、千日前のすさまじい「人込み」のなかにのみあらわれ、源太郎の記憶のなかの武士もまた、千日前から道頓堀への街のなかで、たのしげに語られるものになっている。

この意味において、わたしたちは、「鱧の皮」を、「権力的なもの」と「街」との抗争と、「街」の優勢の物語と読むことができるだろう。（もしかすると、「鱧の皮」に「権力的なもの」を読みとつてこなかった従来の論は、それが「街」の物語によって包囲されていることを重視したのかもしれない。）

こう考えれば、「大阪の言葉」の巧みさを謳われるこの物語にあつて、郵便配達の言葉および水上警察の言葉に、おなじく標準語を配している物語の意図がみえてくるだろう。この人々が使用する言葉は、「街」からは遊離し、「街」を外から射抜くような言葉である。呼びかける郵便配達と水上警察の言葉と、それに応えるお文と源太郎の言葉とは、物語における「街」と「権力的なもの」との抗争をあぶりだしている、といつてよい。

「食物」と「人込み」からなる「街」の思想

ところで、「街」とはなにか。「権力的なもの」と同時にあらわれて、それを分断し、ついには包囲してしまう「街」は、さらにいかなる意味をあたえられているのだろうか。

お文と夜の街を歩く源太郎は、洋服を着た兵隊を街からはらいのけたのち、善哉屋の横に置いてある大きなおかめ人形をながめながら、こんなふうにいる。

「死んだおばんが、子供の時からあつたと言うてたさかい、余ッほど古いもんやうな。」

かう言つて源太郎も、七十一で一昨年亡なつた祖母が、子供の時にこのおかめ人形を見た頃の有様を、いろ／＼と想像してみたくなつた。其の時分、千日前は墓場であつたさうだが、この辺はもうかうした賑やかさで、多くの人たちが、店に並んだ食物の匂を嗅ぎながら歩き廻つてゐたのであらうか。其の食物は皆人の腹に入つて、其の人たちも追々に死んで行つた。さうして後から／＼と新しい人が出て来て、食物を拵へたり、並べたり、歩き廻つたりしては、また追々に死んで行く。それをこのおかめ人形は、かうやつて何時まで眺めてゐるのであらう。

過去からいままでの人々の生き死にが堆積している場としての「街」。この「街」では、「食物」（およびその「匂い」）が特別な位

置をあたらえられている。「多くの人たちが、店に並んだ食物の匂を嗅ぎながら歩き廻つてゐたのであらうか」という見方は、この物語ならではの、「街」にたいする独特な見方である。

借金をしたまま逃げだした夫の手紙のなかで、お文がもつともころをゆさぶられる「鱧の皮」、そしてこの作品のタイトルになつてゐる「鱧の皮」も、この「食物」に関係しているにちがいない。⁽¹⁾

作品のタイトル「鱧の皮」は、お文と福造との関係が「皮」一枚でつながつてゐるという消極的な関係において選ばれてゐるのではなく、おそらく、皮になつても食べ物は食べ物という、食べ物の特権性から積極的に選ばれたと考へてよいだろう。

そして源太郎が「光淳」と名をかえて登場する物語、「鱧の皮後編」と銘うたれた「妾垣（てかけがき）」には、つぎのような注目すべき「街」があらわれる。

名所旧跡を見て歩くことが好きだった母に似てきたのかと思ひはじめてゐる光淳は、毎日、街の一人歩きを欠かさない。光淳は思う。「自分が何うしても仏門に入り得ないのは、其の方便が厭やなからである。印度の山の中から出て来た教へは、いろ／＼の小細工を加へても、煎じ詰めると、山の中のものである。大乗も小乗も落ち着く先は、無の外道である。山を下りて、こんな町の中に寺を建て、みて、一向念仏の響きの末には、幽遠と玄妙との音波が拡がつてゐる。天台、真言、矢ツ張り其処へ流れ込んで、山の奥に隠遁する。自分はそれが嫌いだ」。こう思う光淳は、少年のころ「人込みの中に」見失つてしまつた少女の幻影を追ひ求

め、今日も人込みのなかを歩きつづけるのである。

「街」は、ここで、「隠遁」を拒絶したところにあらわれるなにかになつてゐる。いいかえれば、「人込み」のなかにいつづけることのつよい思ひのかぶさる場になつてゐる。なにがあらうとこの場からでていかない、そのような「街」である。

「鱧の皮」と続編「妾垣」をかざねて、「街」をながめてみよう。

「街」は、一方で巡査や兵隊の体現する「権力的なもの」を拒みつつ、他方で「隠遁」という逃避を拒む、その両端のあいだにひろがる場、なのである。

ここではなにがおこるかわからない。人攫ひがあり、意にそまぬ関係があり、また、生きる楽しみも容易に見つからない。あるいは、商売の成功はいつも失敗が背中合わせで、夫婦はいさかいがたえず、人はしばしば「権力的なもの」の横暴にも対応しなければならぬ。しかし、この場で、この人込みのなかで、生きていくことを選ぶ——物語は、源太郎だけでなくお文にもまた、そのようなつよい思ひを抱かせてゐる、といつてよいだろう。

もちろん、「権力的なもの」は、街を歩き、喇叭節をくちずさみ、食べ物の匂いをかぎつつ、その力を貫くのかもしれない。「権力的なもの」と「街」とを完全に分離することは、ついに不可能だろう。しかし、物語は、それをあえて分離しようとする。⁽²⁾ここに、この物語の思想がみえてゐる、といえるかもしれない。

姓名判断によってつくられる波瀾

「権力的なもの」と「隠遁」とのあいだにひろがる「街」。「蝸の皮」では、ここに、姓名判断という興味深いモチーフが埋め込まれている。

姓名判断による波瀾は、じつは物語の冒頭に——「権力的なもの」の出現と同時に、ということは「街」の登場と同時に、あらわれていた。

郵便配達が不審げに「福島磯……」と呼びかけ、お文がすぐには応答せず、「福島磯……此処だす、此処だす。」とあわてて応えるという事態には、「街」特有のにぎわいとともに、姓名判断による名前の変更が関係していたのである。

郵便配達がその振るまいと表情に「権力的なもの」をあらわしたのも、この姓名判断からくる名前の変更がかかわっていたのだろう。

姓名判断に凝っているのは源太郎である。

「福造の居る時から、さう言うてたがな。お文よりお磯の方がえ、ちうて、福島と島やさかい、磯と文句が続いてえ、と、私が福造に言うてたがな。……それで書いて来よつたんや。われの名も福島福造……は福があり過ぎて悪いよつて、福島理記……といふのが、劃の数が良いさかい、理記にせいと言うてやつたんやが、さう書いて来よれへんか。……私んとこへおこしよつたのには、ちゃんと理記と書いて、宛名も福島照久様と

してよる。源太郎とはしよらへん。」

好きな姓名判断の方へ、源太郎は話を総て持つて行かうとした。

「や、こしおますな、皆んな名が二つ宛あつて、……けど福造を理記にしたら、少しは増しな人間になりますか知らん。」

源太郎が姓名判断に熱心なのには、お文は、半信半疑である。しかし、文を「磯」にすることには反対していない。いかに「や、こし」くとも、改名のほかにみずからの現状¹³をうかす術をもたないからだろう。

姓名判断による改名が、人に意味をもつのは、改名が法的に禁止されていたからである。いいかえれば、「名前」そのものの良し悪し以上に、「改名する」という変更の困難性が、その変更の意味あるものにしていった。

法制史研究の井戸田博史は、改名について次のように書いている。「名に関するわが国伝来の慣行は、複名・改名自由ということであった。人は一生の間に数度名を改め、また時と同じにして種々の名でもって呼ばれることがあった。明治になり政府は、近代的な中央集権国家を確立し、流動化し複雑となった社会に対応するために、国民すべてを把握統制することが重要となった。戸籍制度の整備が急務となり、そのため国民を苗字と名で掌握することが必要であった。人の特定を困難にする複名と改名自由の習俗はゆるめられなくなってきた。／明治五年（一八七二）に複名禁止令と苗字名等改称禁止令が布告された」。ここに、生

まれた時に付けられた戸籍名を本名とし、これを唯一の正式名として改めないことを当然とする今日の姿が出現した。⁽¹⁴⁾この禁令は、改名の許可を求める伺いの統出のため、改名許可基準が緩和されていくにせよ、改名禁止が原則であることは変わらなかった。

姓名判断がブームになるのは、日露戦争のさなかといわれている。多くの死者を出しているこの戦争から生還するには改名をとすめたことで、高島易断と姓名判断の名がひろく知られるようになった。

「鱧の皮」が日露戦争直後の一九〇五年を舞台にしているの⁽¹⁵⁾としたら、物語における姓名判断はこのようなブームを背景にしていた、といつてよい。

しかし、ここでも重要なのは、「姓名判断」そのものではない。姓名判断による改名が、「権力的なもの」との関係におかれたことであきらかになる特異な状況こそが重要なのである。姓名判断による改名は、源太郎やお文（そして福造）にとつて求められたものであるが、「人の特定を困難にする」がゆえに「権力的なもの」にはじつに困ったものとなる。郵便配達は、このことから、みずからの「権力的なもの」をあらわにし、いらいらし、怖い顔をしないわけにはいかない。ここにもまた、「権力的なもの」と「街」を生きる人々との背反が示されている。

姓名判断による改名がそのまま、社会的な権力関係を変更する力になることはあるまい。むしろ姓名判断による改名は、個々人に「変更の夢」をいだかせることによって、集団的な変更への

路を閉ざしてしまふ、きわめつけのイデオロギー装置（宗教装置あるいは文化装置）なのかもしれない。いつけん「権力的なもの」と対立するかにみえて、そのようなよそおいのもとに「権力的なもの」を逆の側から強化してしまふ。

しかし、イデオロギー装置の内部においても、さまざまな争いがある。アルチュセールは、「国家のイデオロギー装置は、ただ単に階級闘争の賭金であるばかりではなく、同時に階級闘争の場であり、またしばしば階級闘争の苛烈な諸形態の場でもありうる⁽¹⁶⁾」と述べている。姓名判断による改名にあらわれた個々人の現状変更の願いと、戸籍制度と改名禁止維持をはかり、それにもとづいて「兵士」をつくり戦場に送りもする国家システムとが衝突する——その瞬間を見逃さないこと。「権力的なもの」の不快をひきだしたこの物語は、「街」のただなかでその瞬間を確認している、といつてよい。

「女主人」と「金銭」の物語として

ところで、「鱧の皮」において、もうひとつの「権力的なもの」をあげないわけにはいかない。金銭と女主人、のことである。「権力的なもの」を包囲し終えた「街」には、じつは見逃すことのできない大きな問題が残っていた。それが、物語の終わりに、はつきりと姿をあらわす。

源太郎の心配をよそに、お文は、福造に会うため上京しようと思う。源太郎を電車に乗せたお文はひとり、道頓堀の蒲鉾屋で福造の好物である「鱧の皮」を一円買い、家に帰ってくる。お文の

もとに福造からの手紙が舞い込むところからはじまった物語の、お文の福造への思いが「鱧の皮」によって鮮明にうかびあがる、結末の場面である。

三畳では母のお梶がまだ寝付かずにゐるらしいので、鱧の皮の小包を窃と銀場の下へ押し込んで、下の便所へ行つて、電燈の栓を捻ると、バツとした光の下に、男女二人の雇人の立つてゐる影を見出した。

「また留吉にお鶴やないか。……今から出ていとくれ。この月の給金を上げるよつて。……お前らのやうなもんがあると、家中の示しが付かん。」

寝てゐる雇人等が皆眼を覚ますほどの声を立て、お文は癩癩の筋をピク／＼と額に動かしした。

「何んやいな、今時分に大けな声して。……兎も角明日のことにしたらえ。」と、お梶が寝衣姿で寒さうに出て来たのを機会に、二人の雇人は、別れ／＼に各の寢床へ逃げ込んで行つた。

まだブツ／＼言ひながら、表の戸締をして、鍵を例ものやうに懷中深く捻ぢ込んだお文は、今しがた銀場の下へ入れた鱧の皮の小包を一寸撫で、見て、それから自分も寢支度にかゝつた。(十)

物語の関心はここで、「小さなもの」へとうごいてゐる。大きな街の情景から、人と人とのつながりを確認する「小さなもの」

すなわち鱧の皮へ。

しかし、それをひそかに持つて帰つたお文の充足感を、店の男と女の隠れた逢引が掻き乱す。二人を見たお文は、「鱧の皮」で夫とつながる妻でありながら、留吉とお鶴という使用人をしっかりとばし、その関係を阻む「女主人」(一)へと変貌する。じつは、物語にはまえにも一度、この二人のコソコソ話を甲高い声で叱るお文がみえていたし、その直後、店にあらわれたお梶(お文の母)に「氣を付けッ」の姿勢をとる使用人たちの姿があつた。

お文が二人の使用人を叱るところに、「満たされない女の欲求不満」をみる見方もあるが、「表の戸締をして、鍵を例ものやうに懷中深く捻ぢ込んだ」などからすれば、これは「女主人」と使用人との間の権力関係をあらわす出来事のひとつとみてよいのではないか。

だとすれば、「権力的なもの」に対し「街」を確保してきたかにもえる物語は、最後にいたつて、「街」のなかの権力関係を可視化する「権力的なもの」を露呈させたことになる。使用人のふるまいにいちいち介入し、使用人を規律訓練のもとにおく。使用人を矯正し、従わない使用人は放逐しようとする、そのような「権力的なもの」を。

「街」をだらしなく、あるいは苦しみながらも生きてきたお文と源太郎たちの物語は、ここにいたつて、じつはこれが「女主人」と「女主人の叔父」の物語であることを、読者に告げる。

叱られた留吉とお鶴は、「女主人」のまえで、抵抗することはもとより言葉を発することさえ奪われている。お文と源太郎がふ

たりして「権力的なもの」とむきあった場面とは、あまりにちが
いすぎる。夜の「街」にもまた、「権力的なもの」は深くひろく
根を張っていたのである。

そう考えると、「鱧の皮」の「一円」という値段も気になつて
くる。

この時期、「もりそば」は二銭。「まむし」(讃岐屋のあつかう
品は、ほぼ三〇銭¹⁸⁾。それにたいして、「鱧の皮」は、高いも安
いもなくただ「一円」と記されている。讃岐屋主人福造の借金三
千円とくらべれば、この一円はたしかに「小さなもの」かもしれ
ない。しかし、この時代の使用人たちの給金が月額一〇円程度で
あったことからすれば、一円はけつして「小さなもの」ではな
い。そして、物語がこのことに自覚的であるというしるしはつい
にみいだせないのである。

ここで「小さなもの」が人と人をつなぐのだとしたら、そこ
では「小さなもの」が人と人との関係を壊し、人の命を奪つてし
まう。ここでの「小さなもの」が物語の終わりにおかれるのにた
いし、そこでは「小さなもの」がつぎの物語へ、はげしい闘争の
物語へと爆発的に展開していく不可欠の契機となる——そのよう
な新たな物語を、近代文学は、ほぼ一〇年ののち、知ることに
なる。そこでは、銅貨二銭がクロージアップされる。⁽¹⁹⁾しかし——。

しかし、「権力的なもの」を包囲してしまう「街」はたしかに
存在し、源太郎とお文たちの「権力的なもの」とのささやかな抗
争は消えない。また、姓名判断のもたらすわずかな変更が無効に
なるわけではない。反対に、「権力的なもの」を体现してしまつ

た郵便配達や巡査たちの、「街」からの遊離のむざんさが消えて
しまふのでもない。そしてだからこそ、使用人たちの怯えと、あ
る種の「ふてぶてしさ」が生きてくるのかもしれない——こうし
た問題をふくみつつ、「鱧の皮」という物語は、わたしたちのま
えにある。

注(1) 上司小剣の「鱧の皮」は、一九一四年一月号の「ホトトギス」に
発表された短篇である。本論では初出をテキストにした。登場人物
にそくした物語のストーリーは、以下のとおり。道頓堀の料亭讃岐
屋の女将お文のもとに、多額の借金をしたまま家出をしている夫福
造から無心の手紙が届き、その最後に小さな字で「鱧の皮を御送り
下されたく候」とあった。母のお梶はまったくとりあわないが、叔
父の源太郎は、お文のゆれる気持ちを感じている。源太郎を誘い小
料理屋で浴びるように酒を飲んだお文は、福造に会いに行くことを
源太郎に告げ、夫の好物である鱧の皮を買って帰るのだった。

(2) ルイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装
置」(西川長夫訳「思想」一九七二・七・八)

(3) ミシェル・フーコー「監獄の誕生」(田村俣訳 新潮社 一九七
七・九)

(4) 初出(「中央公論」一九一五・七)では「鱧の皮後編」と銘うた
れていない。

(5) 田山花袋「新年の文壇(四)」(「時事新報」一九一四・一・四)、
中村星湖「新年の文壇」(「文章世界」一九一四・一)他。

(6) 近年では、森崎光子や荒井真理亜がこの見方をしている。荒井の
「上司小剣「鱧の皮」論」(関西大学国文学会「国文学」二〇〇
一・三三)、同「上司小剣「木像」・その文学的転換」(同「国文学」
二〇〇二・一)は、丹念な調査に基づく好論文である。

(7) 「上司小剣論——明治社会主義と大逆事件へのかかりを中心と

して」(「思想」一九七三・十)をはじめとする、上司小剣の社会主義への独特なかわりを肯定的にとらえだす吉田悦志の精力的な試みはじつに示唆に与むが、「鱧の皮」を含む「大逆事件直後から大正五年前後までの小剣文学」を「作品への自己投影を避ける隠匿の文学」(上司小剣「西行法師」における主題と方法」、「日本近代文学」一九八三・一〇)とみなしている。

(8) 宇野浩二「解説」(「鱧の皮 他五編」 岩波文庫 一九五二・一)

(9) 木下尚江の「火の柱」(一九〇四・五)では、剣を握って厳しく立つ巡査は「窃盗、賭博」などと同類とされる。また、岩野泡鳴の「巡査日記」(一九二二・八)には、誰彼となく「誰何」し「叱りつけ」て人々から忌み嫌われる巡査が登場する。警察史研究の大日方純夫は「日露戦後における民衆統治——都市民衆騷擾と監視庁」(「史観」一九八二・一〇)で、「東京全警察焼打事件」とも称すべき日比谷焼打事件(一九〇五)のち、民衆と警察の亀裂はさらに拡大し、「民衆は警察を恐れ、非難し、嫌悪した」と書いている。荒井真理亜の調査によれば、「鱧の皮」の舞台は日露戦争直後の大坂である。

(10) 「鱧の皮」の母胎と青野季吉が評価した「木像」(一九一〇・五―七)や、すこしあとの「兵隊の宿」(一九一五・一)にも、巡査、兵隊、郵便配達などは登場するが、「街」との関係においてあらわれているとはいいたい。

(11) 篠田一士は「世界文学「食」紀行」(一九八三・九 朝日新聞社)のなかで、「鱧の皮」という食べ物が、作品全体の主題と深く関わり、あたかも、陰の主人公のようになっている点も、日本の近代小説のなかでは、他にほとんど類がなく、これこそ、名実ともに食物小説といつてよいものである(「鱧」と評している)。

(12) あるいはここに、上司小剣の大逆事件後の思想が読みとれるかもしれない。

(13) 石井研堂「明治事物起源 1」(ちくま学芸文庫版 一九九七・五)の「第一編 人事部」には、「姓名改称の禁」のつぎに「姓名判断」が記されている。

(14) 井戸田博史「明治前期の改名禁止法制」(「帝塚山法学」一九九八・三)、同「明治前期改名禁止法制資料」(「日本文化史研究」一九九八・三)。

(15) 荒井真理亜「上司小剣『鱧の皮』論」(6)と同じ

(16) ルイ・アルチュセール(2)と同じ

(17) (15)と同じ。

(18) 週刊朝日編「値段史年表」(朝日新聞社 一九八八・六)

(19) 黒島伝治「銅貨二銭(のち二銭銅貨に改題)」(「文藝戦線」一九二六・一)

(付記) 本稿は早稲田大学二〇〇一年度特定課題研究助成費(個人研究) 課題番号 2001A-035 による研究の成果である。